

色染科卒業生にこんな仲間が おられました

昨年から事務局は色染科全体の名簿入力を行ってきました。その作業の中で名簿には記載されていない色々な事がわかってきました。今回ご紹介する仲間のこともそのうちの一つです。

* 親子:夫婦三名揃って色染科卒業生 *

親子あるいは兄弟が色染科というのはいかほどの数が確認されています。夫婦が色染科というの、現在わかっているだけでも6組あります。しかし、《親子:夫婦三名揃って色染科》というは空前絶後、色染科が消滅した今ではこの方々以外にはありえません。

そこで、事務局では過日取材を兼ねて面会を申し込みましたが、辞退され、以下のような返信が事務局に届きました。個人のプライバシーにかかわることも含まれていますので、一部編集を加えながらご紹介させていただきます。

* ご夫婦からの返信 *

お手紙ありがとうございました。
まことに申しわけありませんが、父が亡くなっており、会誌の取材の件は辞退させていただきます。これも何かの《縁》と、父や自分達夫婦のこれまでを【自己紹介】の心算で書いてみました。

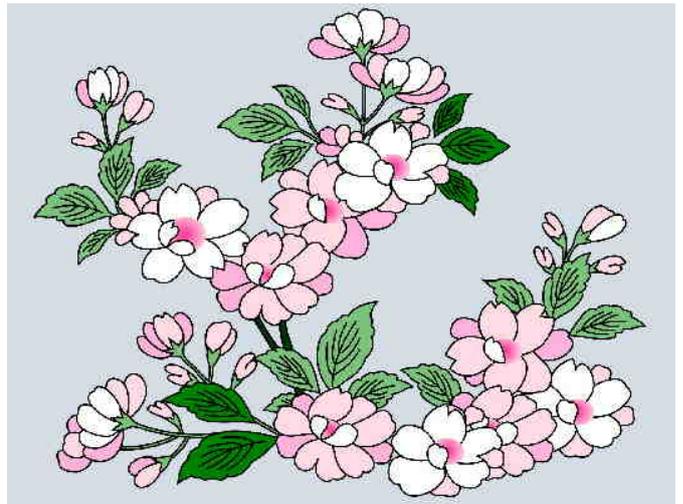
父は、実は薬科大学にも合格し実際通学していたそうですが、家庭の都合であきらめ、色染科への転校を余儀なくされたそうです。父としてはかなり不本意なスタートになったことだったのでしょう。さらに苦労は重なるもので、戦争中の大変な学生生活で体をこわし、一年遅れで卒業（昭和22年）しました。本来は昭和20年だそうです。

卒業後は東洋紡に就職するも、上司とうまく行かず辞め、とにかく染工場に勤めるも、これも永續できませんでした。

人の薦めもあってとうとう自分で染工場を始めました。物はナイロンミシン糸の染色です。当時はひどい《染むら》が当たり前でしたが、独自の方法で《染むら》を克服しました。仕事は順調に伸び、設備も充実して行きました。一方で

【堅牢度にこだわりすぎればナイロンの縫い糸としての強度や伸縮性を損なう…】
という考えを生涯を通じて貫き通しました。たとえ得意先の反発を食らって注文がなくなろうともこの考えを曲げませんでした。

私は昭和48年（1973）の入学、第1次石油ショックの年でした。世の中は経済優先からクリーンな自然環境を求め始めていました。《公害:環境汚染をなくそう》が大きなテーマでした。



とりわけ染色と水の関係で、《水を少なく》《水を使わない》《水の再利用》などを目標に多くの研究がなされてきました。卒業後はすぐ父と一緒に長靴をはいて現場に立ちました。真っ黒になって現場をならうのが一番と思ったからです。

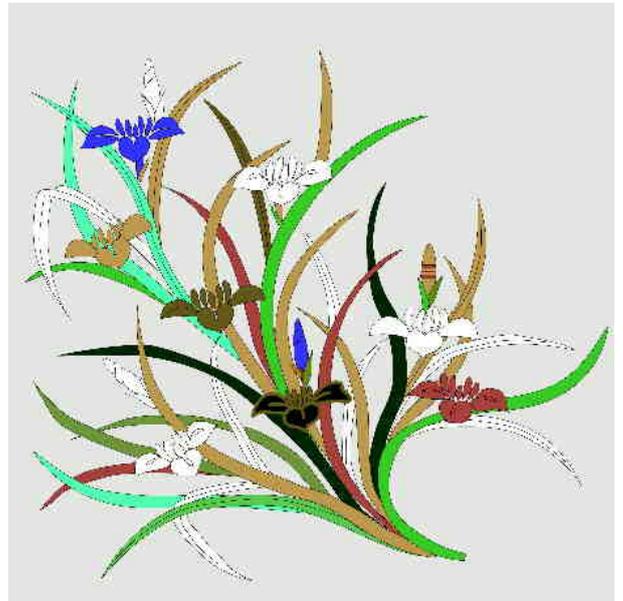
3年ほどして「そろそろ結婚せなあかんなあ…」となり、父の勧めで【お見合い紹介】に登録したところ、送られてきた履歴書を見てあっと驚きました。同じ色染科の後輩でした。さらに私が大学院生で、お互い【染の会】を通じてよく知っていました。（この会は学年を越えて少しでも染色に親しむ事ができればと専攻の先生の発案で出来ました）

卒業後ブランクがあるにも拘わらず、ある日突然こんな形で会うとはまったく不思議な【縁】でした。話は順調に進み1年ほど交際し結婚しました。仲人は父の同期の大西淑人先生にお願いしました。

ほどなく二人の子供にも恵まれました。しかし肝心の仕事はバブルの崩壊と長引く不況と云われながら年を追う毎に下降線をたどり現在に至っています。さらに残念なことながら父は平成17年（2005）に亡くなり、母も後を追うようにその翌年亡くなりました。今思えば両親との三世代同居は貴重な日々になりました。

子供たちもそれぞれの道を歩み出しています。息子は父の行きたかった同じ薬科大学に進学しました。父が生きていればなんと云って喜んでくれたのでしょうか？…。なお仕事は夫婦でボチボチやっています。以上【色染】と我が家の不思議な縁です。大げさかもしれませんが、【運】を運んできてくれた気がします。皆様によろしくお伝えください。（匿名希望）

（カットは事務局が日本の伝統模様から 桜 杜若 を選び挿入しました）



（事務局編集）